

イラストレイテッド外科手術 第3版 膜の解剖からみた術式のポイント

篠原 尚, 水野恵文, 牧野尚彦 著

＜書評者＞ 笹子三津留 (兵庫医科大学主任教授・上部消化管外科)

手術を勉強中の外科医にはぜひお勧めしたい1冊です。私も手に入れて良かったと心より思っています。理由は以下の通りです。

各時代に解剖にうるさい外科医はいましたが、その多くは癌の専門家で特定の臓器に関する造詣が深い人たちでした。その先人たちから私も多くを学びましたが、本書は中小規模の病院で、すべての分野の一般消化器外科患者の手術に携わらねばならない外科医にとって、必要と思われる術式がほぼ網羅されています。これだけの内容、そして数百の素晴らしい図をほとんど1人で手がけた書物は他に類を見ません。

さて、内容を具体的に少し解説しますと、多くの消化器外科医がそうであったように、今でも胃癌の根治手術をマスターすることは上腹部の手術のみならず、小骨盤内の手術は別として腹部臓器の大半の手術に通じる解剖学的内容の多くが学べるものです。本書も、胃癌手術に関する記載が全体の約1/4を占めています。

本書の骨格は膜の解剖です。ヒトの臓器を最もスムーズに取り除く方法は、形作られてきたプロセスを元に戻していくことであり、言い換えれば発生時に癒合した膜をはがしていくことです。本書では手術を実際行っているときのイメージに合わせて発生学をわかりやすく説明しています。そして一貫して流れている腸間膜に代表される間膜という考え方が、複雑そうな解剖をわかりやすくしてくれます。直腸癌手術における解説は今までにないもので、直腸の手術を久しくやらない私にとっても大変興味深いものでした。

実際の手術場面を彷彿とさせる巧みな図がすべて篠原先生の描き下ろしで、前版より精度も上がり、よりわかりやすくなっています。このこねた絵は正確な解剖の知識なしでは描き得ません。手術はまねから始まりますが、絵をまねて描いてみることも手術が上手になる方法の1つかもしれません。ぜひ試してみてください。

この手術書を通読する方もいれ

ば、手元に置いて近々行う手術のためにその都度該当する章を読む読者もいるでしょう。できればまず通読して、そして明日手術というときにおさらいをするのが良いでしょう。通読となると少々疲れますが、そういう状況も想定してか、ウイットに富んだ各章の前書きに誘われて、つい次の章へと突入してしまいます。また、所々に登場する篠原先生が教を受けた牧野先生や研修医のショートコメントはエッセイ風で疲れた頭を休めてくれ、ほっと一息つかせてくれます。

私自身数多くの手術を手がけてきた今でも、解剖に疑問を感じる場合があります。本書はそんな長年の疑問を解決できるヒントを与えてくれました。その内容は残念ながら今版には具体的に明記されていませんが、次の版では間違いなく明快に記載されるものと期待しています。いつまでたっても学びが多いのが手術です。購入をお勧めします。

●A4 頁500 2010年
定価 10,500円
(本体 10,000円＋税5%)
[ISBN978-4-260-01023-8]
医学書院刊